

芦屋大学論叢 第85号

(令和8年3月22日)抜刷

現代における自己同一性形成の再定義に関する一考察

—Erikson の心理社会的発達モデルを越えて—

林 知 代

現代における自己同一性形成の再定義に関する一考察

—Erikson の心理社会的発達モデルを越えて—

林 知 代

芦屋大学臨床教育学部特任教授

1. はじめに

「自己同一性（セルフ・アイデンティティ）」は、Erikson の心理社会的発達理論の中核をなすもので、特に青年期における発達課題として重要視されてきた。なお、Erikson の identity は本来“ego identity（自我同一性）”を指すが、本論では現代的文脈における broader な自己概念との接続を重視し、便宜的に「自己同一性」と表記する。彼のいう自己同一性とは「これが自分だ」と感じられる一貫性と連続性の感覚を意味している。つまり、時間的な自己の一貫性と連続性、および他者による承認を感じられることであり、この2つの感覚が確立されることで、個人は将来に対する不安を乗り越え、社会的役割や職業的目標に向かって進むことができると主張した（1968）。そして、彼は青年期を「モラトリアム（猶予期間）」と呼び、社会的責任が一時的に猶予されることで、自己同一性の模索と確立が可能になると考えた。

こうした考えは、家族、地域、職業、国家などの枠組みが明確で安定したものであるという大前提によって支えられている。しかし近年のグローバル化、情報化、個人主義の進展により、これらの枠組みは相対化され、自己を定義する基盤は多様性のなかで揺らぎを見せている。現代社会において自己同一性を、従来の固定された属性に照らすと、自分は何者であるかの基準は、現代において、より曖昧で脆弱になり、自己は流動的なものとして断片化してしまう。このように心理社会的発達論の一視点から自己同一性をとらえようとすると、その獲得は困難なものになっている。

自己同一性は他者との関係性の中で常に再構成されるということは、現代の心理学領域において否定する者はいないだろう。しかし上記のように、現代の時代的・社会的背景のなかで自己同一性を獲得しようとする場合、それは困難さを意味している。ただ、それは自己の喪失を意味しているのではなく、むしろ更に自己をどう定義づけるかという新たな問い直しの契機という課題を含んでいるとも言える。

本論では現代における自己同一性の定義の見直しを、時代的背景を照らしながら、Erikson の心理社会的発達理論モデルを越えて Stern の自己発達モデルを基盤に捉えることが可能であることを考察していく。

2. 『個』と社会的同一性の矛盾

現代社会において青年は、かつてないほど多様な選択の自由を享受しているように見える。進路、職業、ライフスタイル、パートナーシップ、結婚観、ジェンダー観など、人生の根幹に関わる価値判断は、基本的に個人の裁量に委ねられている。しかし、この自由は必ずしも解放を意味しない。むしろ、情報環境の過剰さと社会的境界の曖昧化によって、個人は自己の内的欲求と社会的役割のあいだで深刻な葛藤を抱えやすくなっている。

こうした状況を引き起こす要因には、まず、選択の自由と情報過多がもたらす断片化がある。現代の青年

は、「自分はいったい何者なのか」「どのような職業が自己に適合するのか」といった根源的な問いに対する指針をほとんど与えられないまま、膨大な情報に晒されている。「好きなことを仕事にする」という自由の理念が称揚される一方で、資格取得、経済的安定、社会的評価といった外的要請が強く存在する。この二重の規範的期待は、個人の内的欲求と社会的同一性のあいだに断絶を生み、自己の統合性を困難にしている。

2つ目には、モラトリアムの延長と自己同一性確立の困難を挙げることができる。Erikson (1959/1980) が提唱したモラトリアムは、青年期における社会的責任の一時的猶予と自己探索の期間を指す概念である。しかし遡って小此木 (1978) が指摘したように、現代ではモラトリアムは成人期にまで延長されている。進学、就職、結婚、出産といったライフイベントの時期は多様化し、選択の自由は拡大したが、その自由は、同時に、選べない不安を増幅させ、自己同一性の確立を困難にする。選択肢の増加は豊かさの象徴であると同時に、決断の基盤となる価値基準の不明瞭化をもたらし、個人は自由に選べる状況でありながら、実際には十分な内的検討を行えないまま社会的規範に従わざるを得ない状況に置かれている。

3つ目には、社会的承認の外部化と揺れる自己が挙げられる。自己実現とは内的欲求や価値観に基づいて生きることであり、社会的承認は他者の評価や期待に応えることによって得られる。両者が一致するとき、個人は自己同一性を確固たるものとして経験する。しかし現代社会では、数値化・情報化の進展により、自分とは何者かを追求しようとすればするほど社会的同一性が揺らぐという逆説が生じている。

インターネットと SNS の普及により、個人は日々膨大な情報に晒され、内的確信に基づく取捨選択を行う余裕を失いやすい。結果として、本当の自分を実感する前に情報の海へ投げ出され、社会的同一性は常に更新を迫られる流動的なものとなる。こうした状況下で、社会的規範を基準に、になりたい自分や求められる自分を形成しようとする、かえって自己の輪郭を見失いやすくなる。この揺れる自己の感覚は、不安定さや疲弊感を増幅させる。

4つ目には、社会的同一性と内的同一性の乖離という問題があるだろう。上記に挙げた3要因の状況を背景にして、現代において、職業、性別、家族、国籍など比較的固定的な属性に基づく社会的同一性と、内的欲求や価値観に基づく個人的同一性との乖離が拡大しているとも言えよう。この乖離を補償するために、SNS 上の「いいね」やフォロワー数といった可視化された数値が社会的承認の代替物として機能し、自己評価は外部化される。結果として、内的確信に基づく自己同一性は不確かなまま顧みられることがなく、「何かわからない不安」を生み出している。現代の自己同一性の問題が、改めて問われているということだ。

3. 時間軸の断絶と同一性の不確かさ

Erikson (1950, 1959) が提示した自己同一性概念は、個人が生涯発達の過程において「同一であり続ける感覚」を獲得することに重点を置いており、その中心には時間的連続性が据えられている。すなわち、過去の経験が現在の自己を形づくり、現在の選択が未来の可能性を方向づけるという、時間の流れに沿った統合的構造が想定されている。また、Stern (1985) が提唱した中核自己感 (core self) においても、乳児期の相互作用の中で形成される「連続して存在する自己」の感覚が、後の自己発達の基盤となるとされ、時間的持続性は自己の成立に不可欠な要素として位置づけられている。このように、自己同一性とは本来、時間の厚みを前提として成立する概念である。

しかし現代社会においては、この時間軸がかつてないほど断絶しやすい状況に置かれている。デジタルメディアの普及、とりわけ SNS の浸透は、個人の経験を「今この瞬間」へと極端に収斂させる傾向を強めて

いる。X（旧 Twitter）や Instagram のストーリーズのようなプラットフォームでは、投稿は断片的で瞬間的な印象の共有に特化しており、そこには過去の文脈や未来への展望がほとんど組み込まれない。ユーザーは継続的な語りを紡ぐよりも、即時的に評価される可視的な印象を優先しがちであり、自己表現は「物語」ではなく断片の連なりとして提示される。このような環境では、自己は外的評価に左右されやすく、時間をかけて形成される内的な一貫性は後景へと退く。結果として、自己像は瞬間的な断片の集合体として構成され、統合された物語としての自己が成立しにくくなる。

さらに、社会構造の変化も時間的連続性の希薄化を促進している。労働市場の流動化、キャリアの非線形化、家族形態の多様化など、かつて長期的な計画や安定した役割の中で形成されていた生活基盤は大きく揺らいでいる。現代では、長期的な見通しよりも状況に応じた即応的な適応能力が重視され、キャリア形成においても短期間での成果や柔軟な方向転換が求められる。こうした価値観の変容は、個人の時間感覚に影響を与え、自己の語りを「継続するもの」から「切り替えるもの」へと変質させる。結果として、自己同一性は時間的な厚みを失い、瞬間的な選択の積み重ねとしてしか把握されにくくなる。

このような時間軸の断絶は、自己同一性の不確かさを生み出す重要な要因となる。家族の歴史的連続性や、過去の自分と現在の自分が連続しているという感覚が弱まり、未来の自己像を具体的に想像することが困難になると、個人は自己の統合に揺らぎを感じやすくなる。臨床場においても、「自分が何を求めているのかわからない」「将来を希望あるものとして思い描けない」といった漠然とした不安や空虚感が語られることは少なくない。時間的連続性の喪失は、自己同一性の基盤そのものを揺るがし、心理的安定に深刻な影響を及ぼす。

さらに、Erikson の自己同一性概念が前提としていた社会的役割の安定性も現代では大きく揺らいでいる。Erikson の理論は、社会が比較的安定した役割構造を提供し、個人がその中で自らの位置づけを見出すことを前提としていた。しかし現代社会では、社会的役割そのものが流動化し、個人は常に新たな役割を引き受け、適応し続けることを求められる。役割の不確定性は、時間的連続性の喪失と相まって、自己同一性の形成をより困難にしている。

以上の状況を踏まえると、自己同一性を「時間的連続性を基盤とした統合」として捉える Erikson の枠組みは、現代社会の変容を十分に説明しきれない可能性がある。むしろ、Stern が示したような、瞬間的な相互作用の中で生成される関係性としての自己や、多層的で可変的な自己感を前提としたモデルの方が、現代の自己理解により適合する可能性がある。時間軸が断絶しやすい現代においては、自己同一性を固定的な連続性としてではなく、断片をつなぎ直す能力や変化の中で自己を再構成する力として再定義する必要があると考えられる。

4. Stern の自己感発達モデルを用いた現代的自己の再定義

Stern（1985）は、乳児研究に基づき、自己を単一の構造ではなく、複数の層が生涯にわたり同時に活動し続ける発達の構造として捉えた。彼のモデルは、萌芽的自己・中核自己・間主観的自己・言語的自己という四つの領域から構成され、それぞれが異なる発達時期に芽生えながらも、成人期以降も固有の働きを持ち続ける点に特徴がある。誕生直後から形成される萌芽的自己は、生物学的基盤や感覚の閾値といった身体的・生理的レベルの自己であり、個体の最も原初的な基盤をなす。中核自己は生後2～6ヶ月頃に成立し、主体性や連続性、情動調律など、個人が「自分である」と感じるための中心的な感覚を形成する。間主観的

自己は7~12ヶ月頃に芽生え、他者との相互作用のなかで社会的な自己が形づくられる領域である。さらに1歳頃から発達する言語的自己は、言語や物語を通して自己を語り、自己物語を構築する能力を担う。重要なのは、これらの領域が発達段階として単に積み重なるのではなく、一度形成されると生涯にわたり同時に活動し続け、互いに影響し合いながら包括的な自己を構成するという点である。Sternのモデルは、自己を固定的な構造ではなく、多層的で動的なプロセスとして理解するための枠組みを提供している。

このモデルを現代社会に適用すると、自己は「安定性」と「流動性」の両方を内包する存在として理解できる。萌芽的自己や中核自己といった基層の領域は、文化や時代の影響を受けにくく、個人の存在の基盤として相対的に安定している。一方、間主観的自己や言語的自己は、社会的通念、文化的価値、他者との関係性、デジタル環境などの影響を強く受け、変動しやすい領域である。現代社会における自己同一性の揺らぎは、しばしば社会的・文化的要因に帰されるが、Sternの枠組みを用いることで、その揺らぎが上位の層の変動性と下位の層の安定性との相互作用として理解できる。

たとえば、SNSにおける自己呈示は、間主観的自己や言語的自己が強く刺激される領域であり、他者からの評価や社会的比較が自己物語の再構築を促す。しかしその一方で、萌芽的自己や中核自己は、こうした外的変動に対して安定した支点として働き、個人が自分であり続ける感覚を保持する役割を果たす。現代の自己同一性が不安定化していると捉えられる背景には、社会的自己や物語的自己の変動性が強調されすぎ、より基層の自己領域の存在が見えにくくなっているという側面もある。

また、Sternのモデルは、Bauman(1996)に代表されるポストモダン的な「選択可能なアイデンティティの集合」としての自己理解とは異なり、前言語的・身体的次元を重視する点で独自性を持つ。現代社会では、言語的自己が肥大化し、自己物語の編集可能性が強調される傾向があるが、Sternの枠組みでは、物語化されない身体的経験や情動的調律が、自己の連続性を支える重要な基盤として位置づけられる。この視点は、現代の自己同一性研究においてしばしば見落とされがちな身体性の重要性を再評価する契機となる。

さらに、グローバル化や多文化的環境の拡大により、個人が複数の文化的文脈を横断することが一般化した現代社会において、Sternの多層的モデルは特に有効である。社会的役割や文化的帰属が変動するなかでも、中核自己の主体性や連続性が保持されることで、個人は多様な文脈を生きながらも自己同一性を維持することができる。このように、自己の各層が異なる速度で変化し、異なる文脈で異なる働きを示すことを考えると、現代の自己同一性は単一の軸で測定できるものではなく、むしろ多層的で可塑的なプロセスとして理解されるべきである。

以上のように、Sternの自己発達モデルは、現代社会における自己同一性の複雑性を説明するための理論的基盤として有効である。安定性と流動性という一見相反する特徴を、自己の多層構造として統合的に説明できる点において、Sternの概念は現代の自己同一性モデルの再構築に大きく寄与する。特に、物語的自己が強調されがちな現代において、前言語的・身体的次元を含む全体的な自己理解を取り戻すことは、自己同一性の再考において不可欠である。

5. Eriksonの発達モデルを越えて：Sternの自己発達モデル

EriksonとSternはともに自己の発達を扱うが、その理論的焦点と前提とする発達観には大きな違いがある。Eriksonは、自己同一性を心理社会的発達課題として捉え、各発達段階における社会的役割の統合を中心に据えた。彼のモデルでは、自己同一性は主に青年期におけるアイデンティティ対役割混乱という課題の

達成を通して形成されるものであり、社会的期待や文化的規範との折り合いをつけることが重要なテーマとなる。つまり、Erikson の理論は、社会的役割の明確な時代背景のもとで、個人がどのように社会に適応し、役割を統合するかという視点から構築されている。

これに対して Stern は、乳児期の微細な対人相互作用に着目し、自己を多層的に発達し、生涯にわたり同時に活動する構造として捉えた。萌芽的自己・中核自己・間主観的自己・言語的自己という四つの領域は、発達段階として順に積み重なるのではなく、形成後もそれぞれ固有の働きを持続する。特に、前言語的・身体的経験が自己の基盤を形成するという Stern の視点は、青年期以降の社会的課題に焦点を当てる Erikson とは大きく異なる。Stern にとって自己は、身体性、情動調律、対人関係の質といった臨床的に観察可能な現象に根ざした構造であり、社会的役割の統合だけでは捉えきれない内的経験の層を含んでいる。

両者の違いは、臨床的介入の視点にも影響を与える。Erikson の枠組みでは、クライアントの社会的役割や人生段階に応じた課題の整理が有効である一方、Stern のモデルは、クライアントの身体感覚、情動調律、対人関係のパターンといった前言語的領域への理解を促す。特に、トラウマや愛着の問題を扱う臨床では、Stern の多層的自己モデルは、Erikson では十分に説明できない内的経験の複雑性を捉えるための有効な枠組みとなる。

このように、Erikson と Stern は、自己を社会的役割の統合として捉えるか、身体性を含む多層的構造として捉えるかという点で異なる。両者は対立するのではなく、異なるレベルの発達を扱う理論として相補的に理解されるべきである。

ただ、現代社会に焦点を当てると、Erikson の発達モデルの限界がみえてくる。Erikson の発達モデルは、先に言及したように 20 世紀中葉の比較的安定した社会構造を前提として構築された。家族、地域社会、職業といった制度が明確で、個人のライフコースが予測可能であった時代において、青年期における「社会的役割の統合」は確かに中心的課題であった。しかし、現代社会はグローバル化、デジタル化、価値観の多様化、そして SNS やオンライン空間の発達によって、社会的役割が固定されず、個人の生き方が多様化している。このような社会的変化を踏まえると、Erikson のモデルは現代の自己同一性を説明するには限界がある。また、Erikson は青年期をアイデンティティ形成の中心としたが、現代では成人期以降もキャリアや生活環境が大きく変動し、自己同一性は生涯にわたり再構築され続ける。さらに、Erikson のモデルは前言語的・身体的経験を扱わず、トラウマや愛着の問題が自己同一性に与える影響を十分に説明できない。

この点で、Stern の多層的自己モデルは現代社会により適合する。萌芽的自己や中核自己といった基層の領域は、社会的変動に左右されず安定した基盤として働く一方、間主観的自己や言語的自己は社会的文脈に応じて柔軟に変化する。現代の自己同一性は、この安定性と流動性の二重性を前提としなければ理解できない。Stern のモデルは、まさにこの二重性を理論的に説明できる点で、現代の臨床において有効な枠組みとなる。現代の多様化した自己同一性を包括的に説明するには、Stern のような多層的・発達の・身体性を含むモデルとの統合的理解が不可欠であるといえるのだ。

6. 事例

6.1 事例の概要

A (20 歳前半女性) は、乳児期より対人刺激に対する過敏性を示し、7 カ月頃まで母親以外に抱かれると激しく泣き叫ぶなど、外界刺激に対する反応性の高さが認められた。小学校 1 年時には担任教師への恐怖

から母親の付き添い登校を要したが、高学年以降は通学可能となった。しかし、この適応は、環境への過度な同調によって成立していたと考えられ、Aは自身の内的感情へのアクセスを抑制することで日常生活を維持していたと推察される。

成人期に入り自立への欲求が生じると、Aは初めて自身の情緒に注意を向けるようになったが、その過程で強い不安が顕在化した。具体的には、温泉で男性とすれ違った際に裸を想像してしまったことへの罪悪感、中学時代に好意を抱いていた男子が夢に出てきたことを「現在も好意がある証拠ではないか」と捉える混乱、母親と顔が近づいた際に「キス」という語が浮かんだことから「親子であり、自分は女性なのに大丈夫なのか」と不安を抱くなど、通常であれば流れていく思考に対して自己の健全性を疑うほどの動揺を示した。

Aの年代では、ジェンダー、親子関係、他者の生活、犯罪など多様な情報がSNSやメディアを通して日常的に流入し、自己の成熟度に比して外界刺激が過剰になりやすい。Aの場合、この情報量の多さが自己と外界の境界を曖昧化させ、自己同一性の確立過程に混乱をもたらしていると考えられる。

6.2 事例のアセスメント

Aの不安は、現代の情報化社会に特有の外界刺激の多さと密接に関連している。ジェンダー、親子関係、他者の生活、犯罪、性的情報などが、SNSやメディアを通して日常的に流入する現代において、若年層は自己の成熟度に比して過剰な情報に晒されやすい。Aの場合、この情報量の多さが自己と外界の境界を曖昧にさせ、通常であれば流れていく思考を「自分の健全性の問題」として過度に内在化する結果をもたらしている。このような現象は、情報化社会における「自己の過剰な反省化 (hyper-reflexivity)」(Sass, 1992)とも関連し、自己同一性の確立過程に混乱を生じさせる要因となっていると思われる。

6.3 事例の考察

6.3.1 Sternの発達理論による理解

Stern (1985) は、乳幼児の自己発達を段階的発達ではなく、複数の自己領域が重層的に形成される過程として捉えた。Aの事例は、この理論枠組みを用いることで以下のように理解できる。

まず、Aが乳児期に示した外界刺激、対人刺激への過敏性は、身体レベルでの調整機能が脆弱であったことが示唆される。Sternのいう「中核の自己」の段階における外界との相互調整機能が十分に安定化しなかった可能性を示唆する。感覚運動的自己領域の段階で、外界との相互調整が十分に安定化しなかった可能性がある。

第2に主観的自己へのアクセスの困難さが認められる。Aは幼少期から環境への同調によって適応してきたため、内的感情を自覚し他者と共有する「間主観的自己」の発達が相対的に弱かったと考えられる。そのため、成人期に自立欲求が生じた際、初めて自らの情緒に注意を向けたものの、それを自己の一部として統合する経験が乏しく、不安として表出したと理解できる。

第3に情報化社会による言語自己領域間の不均衡が疑われる。現代の若年層は、言語的・社会的情報が過剰に流入する環境に置かれている。Sternの理論では、自己は複数の領域が並行して発達するが、Aの場合、言語的自己や社会的自己に関する情報（ジェンダー、性、親子関係など）が外界から大量に流入する一方で、基盤となる感覚運動的自己や主観的自己の安定性が十分でなかったため、自己領域間に不均衡が生じ自己同一性の揺らぎとして表出した可能性がある。この不均衡は、多くの人が流れていく思考をAは深刻に受け止めてしまうという反応につながっていると考えられる。

6.3.2 Erikson の発達理論との比較

Erikson (1959/1980) は青年期を「アイデンティティ対同一性拡散」の危機として位置づけ、社会的役割の探索と統合を中心に自己同一性の形成を説明した。しかし、A の事例には、Erikson の枠組みでは十分に説明しきれない側面が存在する。

Erikson の理論は社会的役割の統合を重視するが、A に発達に重要な内的感情そのものにアクセスできないという問題は想定していない。A の困難は、役割選択以前の段階、すなわち自己の基盤的な感覚の形成に関わるものであり、Stern の理論に照らすと A の状態を理解可能にする。

次に、Erikson の理論は情報化社会の影響を前提としていない。現代のように外界から膨大な情報が流入し、自己が過剰に反省化される環境を想定していない。A の不安は、情報化社会特有の自己と外界の境界の曖昧化によって生じており、この点も Erikson の枠組みでは扱いきれない。

6.3.3 Stern の発達モデルに基づく心理療法への示唆

本事例に対する心理療法的関わりを構想する際には、Stern (1985) の多層的な自己発達モデルを援用することで、介入の焦点を単一の発達段階に限定せず、複数の自己領域の再調整過程として捉えることが可能となる。A の場合、中核自己および感覚運動的自己領域における外界との相互調整機能の脆弱さと、間主観的自己における内的感情へのアクセスと共有の困難さ、さらに言語自己における過剰な言語情報の流入という不均衡が示唆された。したがって、心理療法は、これらの自己領域のバランスを再構築することを長期的な見通しとして位置づける必要がある。

具体的には、第1に、感覚運動的自己および中核自己の安定化を図る関わりが重要となる。セラピストが予測可能で一貫した態度を保ちつつ、A の身体感覚や微細な情動変化に調律的に応答することを通して、A が外界との相互調整経験を安全に再体験できる場を構築することが求められる。このような関わりは、A にとって過剰に侵入してくる外界ではなく、調整可能な他者としてセラピストを位置づけ直す試みであり、自己と他者の境界を感覚レベルで再編成する基盤となる。

第2に、間主観的自己の発達を支えるために、A が曖昧な身体感覚や不安、違和感を言語化する以前の段階で受け止められる経験を重ねることが重要である。セラピストがA の語りに先行する非言語的な兆候や沈黙を含めて、「いまここ」での主観的体験として丁寧に確認し、共有しようとする姿勢は、A が自らの情緒を「他者と分かち合いうるもの」として感じ直す契機となる。この過程は、環境への同調を通じて内的感情を抑制してきたA にとって、自他の境界を感じつつ、自己の主観的体験を承認し、他者と共有していく練習の場となる。

第3に、言語自己領域については、情報化社会における言語的・社会的情報の過剰流入を前提に、A が取り込んだ言説（ジェンダー、性、親子関係など）をただちに認知的に整理するのではなく、それらがA の主観的体験とどのように結びついているのかをゆっくりと検討していく必要がある。すなわち、A が外界からの言語情報を無批判に内面化するのではなく、自身の感覚・情緒との照合を通じて、自分にとって意味のある言葉として再編成するプロセスを支えることが、自己領域間の不均衡を緩和し、自己同一性の再構築に寄与すると考えられる。また象徴化された内的自己から浮かぶ思考と現実認識実感する自己の言動は別次元であることを、言語を介して確認していくことになる。

このように、Stern の発達モデルに基づく心理療法は、A を単に「青年期の役割選択を模索する対象」としてではなく、感覚運動的自己、中核自己、主観的自己、言語的自己という複数の自己領域が相互に影響し合うダイナミックな過程としてとらえ直し、それぞれの領域に応じた速度と深さで関わりを調整していく臨

床的姿勢を要請する。本事例は、情報化社会における若年者の心理療法において、社会的役割の検討に先立ち、あるいはそれと並行して、基盤的な自己領域の発達と再調整に意識的に焦点を当てる必要性を示唆している。

6.4 事例のまとめ

A の事例は、幼少期からの外界への過敏性と内的感情へのアクセスの困難さを背景に、情報化社会における過剰な刺激が自己同一性の形成を揺さぶったものとして理解できる。Stern の多層的な自己発達モデルを用いることで、A の内的経験と外界刺激の不均衡がどのように自己同一性の揺らぎを生じさせたかを精緻に説明できる。一方 Erikson の発達論は青年期の社会的役割の統合を中心に据えており、A のように、内的感情の基盤そのものが未成熟であるケースには説明力が限定的である。

本事例は、情報化社会における若年層の自己形成の脆弱性を示すとともに、自己同一性の問題を理解する際には、社会的役割の統合のみならず、より基盤的な自己領域の発達を考慮する必要性を示唆している。

A の事例は、言語的・社会的情報の過剰流入という多層的な自己領域の不均衡として理解できる。このような Stern の多層的な自己の発達という視点は、A の事例により適合する。

A の事例は、幼少期からの外界への過敏性と、内的感情へのアクセスの困難さを背景に、情報化社会における過剰な刺激が自己同一性の形成を揺さぶったものとして理解できる。Erikson の発達論では、青年期の役割探索という枠組みで説明しきれない側面があり、むしろ Stern の多層的な自己発達モデルを用いることで、A の内的経験と外界刺激の不均衡がどのように自己同一性の揺らぎを生じさせたかをより精緻に説明できる。

終章

本稿で検討してきた現代における自己同一性獲得の困難を、Stern (1985) の自己発達モデルと接続して捉えることは、自己の構造とその変容可能性を理解するうえで重要な視座を提供する。Stern が提示した萌芽的自己・中核自己・間主体的自己・言語的自己という四つの自己は、発達段階を経て順次置き換えられるものではなく、むしろ生涯にわたり重層的に共存し続ける自己経験の層として理解されるべきものである。すなわち、個体は成人期に至っても、身体的感覚に根ざした自己感から、他者との主体間的な関係性の中で立ち上がる自己感、さらには言語的に構築される自己像に至るまで、多様なレベルの自己経験を同時に保持し、それらを状況に応じて統合しながら生きている。

このような多層的な自己の構造を踏まえると、自己同一性とは単に言語的・概念的に形成される自己像に限定されるものではなく、前言語的な身体感覚や情動的調律、他者との相互作用における主体性の感覚など、より基底的な層をも含み込む包括的な『個』としての自己の統合過程として捉えることが可能となる。Erikson 以来、自己同一性はしばしば「自分は何者であるか」という問いへの回答として理解されてきたが、その問いに答える主体そのものが、Stern のいう多層的な自己経験の上に成り立っていることを考えるなら、自己同一性の形成は単なる認知的・言語的作業ではなく、身体的・情動的・対人的経験を含む広範なプロセスであると再定義できる。

現代社会においては、社会的役割や価値観が急速に変動し、従来のように安定した物語的枠組みを提供する共同体や文化的規範が弱体化している。その結果、言語的自己のレベルで一貫した自己物語を構築することが困難になり、個人は自己同一性の不確かさや断片化を経験しやすくなっている。SNS をはじめとする

デジタル環境は、自己呈示の多様化を促す一方で、複数の文脈に応じた自己像の切り替えを要求し、統合的な自己物語の形成をさらに複雑にしている。このような状況は、自己同一性の危機を、言語的自己のレベルでの物語構築の困難として理解することを可能にする。

Stern のモデルを踏まえるなら、自己同一性の困難は自己の統合そのものが不可能になったことを意味するわけではない。むしろ、四つの自己の層は依然として機能し続けており、個体はそれらの層を素材として、自らの経験を意味づける物語的自己 (narrative self) を編み続けている。ここで重要なのは、Stern がいう物語的自己は単に言語的な構築物ではなく、身体的・情動的・対人的経験を含む多層的な自己経験を統合する働きを持つという点である。すなわち、物語的自己は、四つの自己の層を『個』として包括し、それらを時間的連続性の中で再構成し続ける動的なプロセスとして理解される。

この観点からすると、現代の自己同一性獲得の困難は、自己の多層性が失われたことに起因するのではなく、むしろその多層性を統合しうる物語的枠組みが社会的・文化的に提供されにくくなっている点にこそ見出される。個人は依然として身体的・情動的・対人的なレベルで豊かな自己経験をもち続けているが、それらを一貫した物語へと統合するための文化的・社会的支えが弱まっているため、自己同一性の不安定さが顕在化しやすくなっているのである。

したがって、Stern のモデルを現代の自己同一性の問題に適用することは、自己同一性を固定的な到達点としてではなく、多層的な自己経験を継続的に統合し直す動的な営みとして再定位することを可能にする。この視点は、現代社会における自己同一性の困難を、単なる個人の問題としてではなく、物語的自己の構築を支える社会的・文化的条件の変容として理解するための理論的枠組みを提供するものである。すなわち、自己同一性の問題は、個人の内的な葛藤にとどまらず、自己の多層性を包括しうる物語的構造をいかに再構築するかという課題として捉え直されるべきであると思われる。

【参考文献】

- Bauman, Z. (1996) : *Postmodernity and Its Discontents*. 森田典正訳(1999) : ポストモダニティの現在. 青土社.
- Bauman, Z. (2000) : *Liquid Modernity*. Polity Press. 森田典正訳(2001) : リキッド・モダニティ. 大月書店.
- Bauman, Z. (2004) : *Identity*. Polity Press. 森田典正(2007) : アイデンティティ. 日本経済評論社.
- Erikson, E.H. (1950) : *Childhood and Society*, W. W. Norton & Company. 仁科弥生ほか訳(1977) : 『幼児期と社会』 みすず書房.
- Erikson, E.H. (1959) : *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, New York. 小此木啓吾ほか訳(1980) アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.
- Giddens, A. (1991) : *Modernity and Self-Identity*. Stanford University Press. 松尾精文ほか訳(2005) モダニティと自己アイデンティティ. 而立書房.
- Kohut, H. (1977) : *The Restroration of the Self*. International Universities Press. 本城秀次, 笠原嘉監訳(1995) : 自己の修復. みすず書房.
- 小此木啓吾 (1993) : アイデンティティ論の成り立ちとその臨床的課題. 精神分析研究, 37(1) : pp15-40.
- 小此木啓吾 (1983) : パーソナリティ障害と境界例. 精神分析研究 27(1) pp11-17.
- 小此木啓吾 (1978) : モラトリアム人間の時代. 中央公論社.
- Sass, L.A.(1992). *Madness and modernism : Insanity in the light of modern art, literature, and thought*. Basic Books.
- Stern, D.N. (1985) : *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books. 小此木啓吾, 丸田俊彦監訳(1989) : 乳児の対人世界. 岩崎学術出版社.
- Stern, D.N. (1985) : *The interpersonal world of the infant*. Basic Books.

